

共に考えよう 岡山の医療

一般無料

日 時 2010年2月27日(土) 13:00~17:00

会 場 岡山衛生会館 三木記念ホール

〒703-8278 岡山市中区古京町1-1-10

第一部 基調講演

(13:10~14:40)

【テーマ】

『医療崩壊 –
政権交代でいかに
再生できるか』

座 長

岡山県病院協会 副会長 近藤 捷嘉

講 師

埼玉県済生会 栗橋病院 副院長
NPO法人 医療制度研究会 副理事長

本田 宏 氏

第二部 シンポジウム

(14:50~15:40)

【テーマ】

『地域医療の充実を
どのように図るか』

座 長

岡山県病院協会 議長 金田道弘

シンポジスト

「安心・安全な医療を提供していくために」

新見市長 石垣正夫 氏

「地域が守る医療」

丹波新聞社 記者 足立智和 氏

「地域医療の再生のために」

津山中央病院 院長 徳田直彦 氏

総合討論(15:40~16:50) 講師及びシンポジストと、一般参加者との討論

主催：社岡山県病院協会、社岡山県医師会

後援：岡山県、岡山市、社岡山市医師会、社岡山県看護協会、社岡山県薬剤師会、岡山県愛育委員連合会、

社岡山県婦人協議会、岡山市連合婦人会、財岡山県老人クラブ連合会、山陽新聞社、岡山県ケーブルテレビ振興協議会

【お問い合わせ先】 〒703-8278 岡山市中区古京町1-1-10 岡山衛生会館5F 社岡山県病院協会 事務局

TEL 086-272-6400/FAX 086-272-5587 E-mail : oka-hosp-a@syd.odn.ne.jp

地域医療の課題をめぐり意見を交わしたパネルディスカッション



2007年春、兵庫 つた。
県立柏原病院(丹波市) 私が呼び掛けて開いた
の小児科医2人のうち 市民座談会で、寝ずに懲りて
1人が院長に就任し、く小児科医の過酷な勤務
もう1人は多忙を理由 ぶりを母親たちが知った。私は呼び掛けて開いた
に辞意を表明した。 小さな児童の悲鳴を市中で聞かせる事
産婦人科の出産取り扱いも休止になる恐れがある」出席者を中心とした意見交換会で、この問題が取り上げられた。意見交換会では、多くの意見が述べられ、その多くが児童虐待や虐待の問題である。
足立智和・丹波新聞(兵庫県)記者

市民が小児科守る活動

もう1人は多忙を理由に辞意を表明した。児科が閉鎖されれば、産婦人科の出産取り扱いも休止になる恐れがある。出席者を中心、「県立柏原病院丹波市」の小児科医2人のうち1人が院長に就任し、く小児科医の過酷な勤務状況を憂うる声が、ついでに現れた。この問題に対する意見は、丹波新聞（兵庫県）記者足立智和・丹波新聞（兵庫県）記者

る会」が発足した。
約5万5千人分の署名を集めても、病院を運営する県は「医師は送れない」と言つ。ならば医師が働きやすい環境をつくる活動

が張って主張しよう。
名 設置した。
活動が実を結び、小児
科の時間外受診は半減し
た。こうした取り組みが
評価され、大学からも医
師が派遣された。現在の
小児科医は5人。労働環
境は改善されている。
他の市民グループも病
院を支える活動を始め、
大勢が病院にかかるよ
うになった。医療は「限
めのある公共財」。みんな
で大切にしよう。

パネルディスカッション

い。患者は非常に困ってから医療費の無料化対象いる。市も施策を講じていった。一時なくなった救急車。医師不足が問題となる。告示病院は県などにお願っている産婦人科では、いを重ねた結果、08年12月から復活している。2003年開設の国際貢献大学校メディカルクリーク。中四国で唯一、運航さ

高度医療なく患者困る

新見市は、人口あたりニック(同市哲多町本郷)の医師数が岡山県平均の4割程度。軽症の1次、2次医療は地元で受診で、3次医療は遠く離れた県南などの病院に行かざるを得なきが、高度な交通費だけでも相当な負担となるため、昨年4月に補助。市外の妊婦も含め、年間約240人の子どもが産まれている。

れている川崎医大病院のドクターへりは、重篤患者を短時間で県南の病院に運ぶことができて有意義だ。夜間運航も検討されれているが、増大する経費に対応するには、県と県内全市町村を挙げた取り組みが必要だろう。

地域医療の再生に特効薬はない。医療機関、地域住民、行政、メディアの「四位一体」の使命感と覚悟を持った取り組みで、慢性的な疲弊状態から立ち直らせたい。危機に直面した今は、たぐましく変わることができるチャンスでもある。

**中央病院長
で再生必要**

を安全のためのインフラと認識し、医師が快適に働ける環境を整えてほしい。現場にまり込み、住民の安全を最先した政策を考えてほしい。

「四位一体」で再生必要

認識し、医師が快適に働く環境を整えてほしい。現場に泊まり込み、住民の安全を最優先した政策を考えてほしい。

患者は安価で一流のサービスを求める。だが、安全とサービスを高めるには人、力、モノが要る。医療者がひたすら努力してもギャップを埋めることはできないし、そうした努力が評価されてもいい。メディアは正しい情報を伝えてほしい。

医療人は、安全と信頼関係を第一にしながら、医療が社会の共通資本であると訴える必要がある。主張すべき事を胸を張って主張しよう。

命の安全保障 関心を

1997年、政府は医療制度改革を打ち出した。将来、高齢化が進むと医療費がかさんでしまう、ならば改革によって抑制しようというのが主な目的だった。

その後も小泉改革など、医療費はほとんど上がっていない。むしろ下がっている。その仕組みとして、国は診療報酬を低く抑えてきた。國際的に見ても日本だと約400万円もかかる。このようにして、日本の医療費は非常に安い。例えば、日本で30万～50万円の出産費用が米国だと約400万円もかかる。

で昨年までの約30年間、収入は減り、赤字で閉鎖せざるを得ない病院も出てきている。医療は医師だけでなく周囲で働く人も大勢必要だが、

赤字だと十分な人材が確保できない。当然、医療事故の危険性は高まる。

墨東病院など力所の医療機関に妊娠が救急受け入れを断られ、出産後に亡くなつたことがあつた。墨東病院は東京都のER（救急外来）の役割を持つ病院といつていいが、産科常勤医は4人しかおらず、アルバイトを雇つても、この体制で毎晩の当直は絶対に無理。首都でも医師不足なのに、地方で医師が余つているわけがない。医療は命の大事な問題である。

医師は一人で何役もこなさなければならず、過重労働は進む。医療事故があれば刑事責任まで問われる。あまりにもやり方がまずくなってしまうか、いだらうか。

このままだと日本の医療は崩壊する。だからこそ、声を上げる必要がある。医療は命の大事な問題である。

地域医療の在り方を探る第2回岡山県民公開医療シンポジウム（県病院協会・県医師会主催、山陽新聞社など後援）が2月27日、岡山市内で開かれた。病院関係者、市民約400人が医療崩

壊や医師不足をテーマにした基調講演と、3人のパネリストのパネルディスカッションを通じ、医療を取り巻く課題を考えた。要旨を紹介する。
(井上光悦、馬場信彰、佐藤貴宏)

基調講演

第2回岡山県民公開医療シンポ

医師不足し過重労働



近年、医師不足がクローズアップされている。医師は都会に集まり、地方に少ないという偏在が指摘されているが、果たしてそうなのか。

に、日本は逆に医学部の定員を減らしてきたから。医師を減らせば医療費も上がらないという考えがあつたのだろ。経済協力開発機構（O.E.C.D.）加盟国と比べても、日本の医師数は非常に少ない。その結果、現役医師の労働時間は週60時間を超え、80歳以上の医師も働いている状況。